
やきもち焼きな彼女

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やきもち焼きな彼女

【Nコード】

N3363F

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

付き合い始めてわかった佐藤の意外な素顔。高木は佐藤に振り回されっぱなしで・・・

警視庁の休憩所の片隅で、空になった紙コップを片手にその男は佇んでいた。

高木は悩んでいた。

他の人から見れば、些細な悩みだと思う。

それどころか下手すると羨ましがられそうな悩みだ。

しかし、高木が悩んでいるのもまた事実だった。

高木を悩ませるその元凶。

それは他ならぬ高木の恋人、佐藤美和子その人だった。

付き合い始めた頃は気付かなかったが、最近になって、高木はあることに気が付いた。

佐藤が実は、物凄くやきもちやきだということに。

最初にその事に気付いた時、高木は単純に嬉しかった。

佐藤が何の取り柄もない自分を選んでくれたことに今ひとつ自信が持てなかった高木にとって、佐藤がやきもちを焼いてくれる事が、自分に対する佐藤の愛情を実感できるひとつのバロメーターであったからだ。

そして、それは2人が積み上げてきた時間とともに、少しずつ高木の中に自信となって積み上がっていった。
しかし、だ。

近頃佐藤は些細な事でやきもちを焼くようになった。

職務中は今までとまったく変わった様子はなく、高木が誰と言葉を交そうが、笑顔を交そうが、知ったこっちゃないというようなそっけない態度なのだが、二人きりの時はまるで違う。

高木がコンビ二で顔見知りの女性店員と言葉を交そうものなら、

「涉くん好みの可愛らしい子ね。」
とチクリ。

学生時代の女友達と偶然出会って昔話に花でも咲かそうものなら、

「元カノだつたりして。」
とチクリ。

しかも高木が何より怖いのは、佐藤がにつこり笑顔でその言葉を発することだ。

いくら違つたと否定しても、佐藤は「ふうん。」としれつとした顔で聞き流してしまう。

さらに困つたことに、高木が何度否定しても、しばらくの間、佐藤の機嫌が良くなることはない。

ましてや、佐藤の嫌味に耐えかねて溜め息でもつこうものなら、「ごめんなさいね。つまらない女で。」などと空恐ろしいことを言うてのけるのだ。

付き合い始めた頃のやきもちは、もっと可愛いものだった。

やきもちを焼く相手は今でもほとんど変わらないが、それでも今のようになじわりじわりと真綿で首を絞めるように高木を責めたりはしなかった。

子どものようにぷうつと頬を膨らませてすねてみたり、時には涙ぐんだりする程度だった。

そんな佐藤を見て高木は、悠長にも可愛いなあなどと思っていたのだ。

しかし、そんな佐藤のやきもちは次第にエスカレートしていき、今では取り調べ室の犯人よろしく責めたてられる始末である。

高木としては、貴重な佐藤との時間を拷問まがいなのやきもちの收拾に費やしたくはないのだが、佐藤の嫉妬心に火がついてしまったが最後、その思いは無惨にも砕け散ってしまう。

高木にとって佐藤は他のどの女性とも比べ物にならないくらい大切な存在であるのだが、佐藤にはその想いは伝わっていないのかもしれない。

「どうしたらいいんだろ？」

高木は深い溜め息とともに、ぼつりと吐き出した。

「なに悩んでんの？ た・か・ぎ・くん。」

聞き覚えのある声に、高木はぎくりと肩をすくめる。

恐る恐る振り返ると、そこにはやりと怪しい笑みをたたえた宮本由美が立っていた。

「ああ、由美さん。どうかしたんですか。」

高木は由美に焦る気持ちを悟られまいと、へらっいつもの愛想笑いを浮かべてすつとぼける。

「どうかしたのはあなたの方でしょ。美和子がらみの悩み事ならこの由美さんが聞いてあげてもいいわよ。」

由美はにやにやと笑いながら高木の肩をつつく。

「な、何のことですか。」

ばれないようにしようと思っても、由美の口から佐藤がらみの悩みだと指摘されると、つい動揺してしまう。

「隠しても無駄よ。高木くんの顔にちゃんとかいてあるから。」

高木は思わず言葉に詰まる。

そんな高木を見て、由美は我慢できないとばかりに吹き出した。

「あははは。高木くんってホント、正直者よねえ。特に美和子の事となると弱いんだから。」

由美はお腹を抱えてケタケタ笑い転げる。

「そ、そんなに笑うことないでしょう！」

高木が慌てるのがよつぽどツボに入っただけ、由美は涙を浮かべて笑っている。

由美があまりにも笑うものだから、高木はぶすつと頬を膨らませてふてくされてしまった。

「ごめんごめん。いやあ、高木くんってからかいがあるからついハマっちゃって。」

由美は目尻に浮かんだ涙を指先で拭いながら、申し訳なさそうに言う。

「別にいいですけど。慣れてますから。」

高木は由美から視線を外してむくれる。

「だから、ごめんってば。ちゃんと相談にのってあげるからさあ。」

許して。このとおり。」

由美はすまなそうに胸の前で両手を合わせる。

ちらりと横目で由美を一別して、高木は由美に気付かれないように唇の端ににやりと笑みを浮かべて呟く。

「どうしよかなあ。」

高木のその言葉に、由美は高木の肩を掴んでガクガク揺すりながら、
「さっきから謝ってんじゃない。ほら、言いなさいよあ。」
と真面目な顔をして迫る。

「ははは。冗談ですよ、冗談。解りました。言いますよ。」

真剣な由美の勢いに圧されて高木は最近エスカレートしてきた佐藤のやきもちに参っている事を正直に話した。

「僕が参ってるってこと、佐藤さんには内緒ですよ。誤解の無いように言っておきますけど、僕、佐藤さんがやきもちを焼いてくれるのは嬉しいんですよ。僕なんかのことをこんなに想ってくれてるんだなあ。でも、最近攻撃が厳しくって。」

高木はへらりと笑って付け加える。

「・・・。」

由美は黙って聞いている。

高木はあまりにも由美の反応が無いので、もしかして誤解されたかなと少し不安になる。

「あとう、由美さん？」

高木は心配になって、悪戯がバレた時の子どものように、おどおどした眼で由美の顔を覗き込んだ。

「高木君！」

突然由美にはつきりとした声で名前を呼ばれ、

「はいい！」

高木は思わず敬礼しそうな勢いで背筋を伸ばす。

「あのさ、それって高木君が悪いんじゃないの？」

由美の予想外の答えに高木は面食らう。

頭の中に、疑問符が次々に湧いては消える。

「オレ、ですか？」

あまりにも意外な答えに、思わず『オレ』という一人称を使っていることにも気付かないほど高木は動転していた。

「そう、オレ。」

自分を指差す高木に、由美はこくりと頷いた。

「どうしてオレなんですか？オレが佐藤さんに何をしたって言うんですか？」

良く解らない、というように首を傾げた高木に、由美は真顔で言う。
「何かしたんじゃないくて、何もしなかったのが原因なんじゃないかって言ってるのよ。」

高木はますます良く解らないといった様子で首を捻る。

そんな高木を呆れたような顔で見ながら由美はたたみかけるように続けた。

「だーかーらあ。例えばさあ、学生時代の女友達に美和子のこと、ちゃんと紹介したの？どうせ高木君のことだから、自分からは切り出せずに最後までうやむやにしちゃったんじゃないの？それにさ。さっき私に言ったこと、美和子にはちゃんと伝えてる？やきもち焼いてくれるのは嬉しいけど、なんでもないことまで責められると参るって。美和子は自分にとって特別な存在だって。自分の口でちゃんと伝えたの？」

高木は絶句する。

由美の言うとおり、女友達に佐藤のことを紹介することはなかった。向こうから「彼女？」と聞かれても、言葉を濁してごまかした。それは、別にやましい気持ちがあったからではなく、ただ単に気恥ずかしかっただけなのだが、佐藤はひどく傷ついたのかもしれない。自分の気持ちにしたってそうだ。面と向かって佐藤に伝えるのは照れくさくて、つい気を遣ってしまって、ちゃんと伝えようとはしなかった。

無言で考え込んでしまった高木を見つめていた由美は、少し優しい口調で話しかける。

「高木君に悪気はなかっただろうし、やましい気持ちがなかったのも分かるわよ。でもさあ、美和子は不安だったんじゃないかしら。」
由美の言葉に高木ははっとした様子で顔を上げた。

「佐藤さんが、不安、ですか？」

まだ少し由美の話が飲み込めないといった様子で高木が尋ねる。

「あのねえ。そりゃ、付き合ってる男がちゃんと愛情表現してくれなきゃどんな女でも不安になるわよ。ましてや美和子は恋愛慣れしてないんだから。高木君のこと、勘繰りたくなっても仕方ないんじゃない？」

しかも、なんだかんだ言って美和子は高木君にぞっこんだからーと由美は冷やかすような目で付け加える。

高木はその冷やかしには答えず、じっと顎に手を当てて考え込んだかと思うと、

「少し分かったような気がします。」

と呟いた。

「分かればよろしい。」

由美は少し勝ち誇ったような顔で微笑むと、くるりと踵を返した。

「あ、あれ？由美さん、どこ行くんですか？」

それに気付いた高木が素っ頓狂な声をあげる。

「どこって、交通課よ。仕事に戻るの。」

由美はきよとした瞳で肩越しに高木のほうを振り返った。

「あの、それで僕、どうしたらいいんですかね？」

情けない声で問う高木にくすりと悪戯っぽい笑みを漏らすと、由美は駆け出した。

「知らない。ヒントはあげたんだから、あとは自分で考えなさいじゃあね。」

走り去る由美を呆然と見送りながら、高木はどうしたものかと考える。

ちゃんと愛情表現してこなかった自分。

由美に言われるまで自覚は無かった。それどころか、自分の中では

精一杯の愛情を注いでいるつもりだった。だが、言われてみればそうかもしれない。佐藤はそれが不安で不安で仕方なかったのだろうか。

自分が佐藤のことを特別な存在だと思っていることを伝えるにはどうしたら良いのだろう。

一体どうしたら・・・

高木はふと思いついて顔をあげた。

そして、軽やかな足取りで、佐藤がいる捜査1課に戻って行った。

「佐藤さん。今夜仕事が終わったら、ちょっと時間を貰えますか？」
あらたまったようすで声を掛けられ、佐藤は戸惑った様子で頷いた。
「じゃあ僕、いつものところで待ってますから。」

高木は佐藤が頷いてくれたことに安堵の笑みを浮かべてそう言っていると、部屋を出た。

待ち合わせは近くの公園。

高木はビル群に小さく切り取られた空を見ながら佐藤を待つ。

しばらくすると、佐藤が白い息を弾ませながら走ってくるのが見えた。

「ごめん。遅くなった。」

よっぽど急いできたのか、佐藤は肩で息をしながら短く言った。

「いえ、いいんですよ。僕もしょっちゅう美和子さんのこと待たせてるし。」

高木は柔らかな微笑を漏らす。

つられて佐藤もふんわりと微笑んだ。

「で、どうしたの？急に。」

佐藤は少し不思議そうな表情を浮かべて高木を見上げる。

少しの沈黙の後、高木はポケットの中からこそこそ何やら取り出すと、

「これ、美和子さんに。」

と、佐藤の前に突き出した。

佐藤が手を出したのを確認して、それを掌に置く。

「鍵？」

佐藤は不思議そうにそれを見つめる。

「あの、それ、合鍵なんです。えっと、これを渡すのは、美和子さんだけで。親にも渡してないんで、その、えっと・・・」

しどろもどろで説明する高木の言葉を遮るように、

「私だけ？ いいの？ 貰って。」

佐藤が大きな瞳をさらに大きく見開いて尋ねる。

「もちろんです。美和子さんが嫌でなければ、ですが。」

高木ははつきりと答える。

次の瞬間、佐藤は目を細くしてとびっきりの笑顔で微笑んだ。

「ありがとう。大切にする。」

佐藤はしっかりとその鍵を握り締めた。

高木はその笑顔をしっかりと頭に焼き付ける。

「あの、僕にとって美和子さんは一番大切な人で。他の人とは比べ物にならないくらい大切な人で。だから、その、今度からちゃんと友達にも紹介しますし。僕の、一番大切な人だって。」

高木が言い終わらないうちに、佐藤の瞳からは涙が溢れ出す。

高木はそつと指先でその涙を拭う。

「涉くん、ありがとう。すごく、嬉しいよ。」

佐藤は震える声で呟いた。

とびきりの笑顔を浮かべて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3363f/>

やきもち焼きな彼女

2010年10月9日06時11分発行